

含めた家族の負担につながっていく可能性がある。それらは事実と確率の問題である。もはや(反)道徳の観点から、あるいは(反)規範の観点から、性交開始年齢を議論する時代はすぎさった。性交開始に至るまでの期間を禁欲期間(abstinence)とよんでもよいが、禁欲を(反)道徳の観点から、あるいは(反)規範の観点から問題視する時代ではないと考える。今後は、事実と確率の観点から議論していきたい。

性交開始年齢は正規分布していた。生物学的な見方をすれば納得のいく結果である。分布の範囲は11歳から42歳と幅が広く、低年齢から性行動を開始するものと、高い年齢から性行動を開始するものまで、それぞれの性戦略には幅がある。仮にそれらを「早咲き戦略」「遅咲き戦略」とでもしておこう。

今回の解析では、性交開始年齢をそのまま連続量として取り扱った。新しい時代の性教育(sex education)では、性行動の低リスク化を目指すからである。性教育がある程度の集団を対象におこなわれるならば、集団において性交開始年齢を上昇させることがその一つの大きな目標である。「早咲き戦略」のものを少し遅らせるということも当然その目標となる。

性戦略には生物学的なバックグラウンドがある。ゆえに、社会的な環境(家庭環境など)がどのような影響を持ちうるかに興味がわくところである。次項で検討していくこととする。

(4) 親子の会話と性交開始年齢

中学生の頃までをみると、親と普段よく会話したものはマジョリティであった。その一方、親と性に関する会話をよくしたものは、ほぼいないに等しかった。性という事柄は「普段」には入っていないということだ。つまり「特別」なことである。先に触れたKirby博士も、その報告書「Emerging Answers」の中(要約版の第9ページ)で、親は子どもとの会話で性を扱うことに困難を感じていると述べている。洋の東西を問わず、親子の会話で性はほとんど扱われな

いということかもしれない。つまりそれは通社会的である可能性がある。それならば、親子の会話で性が「特別」に扱われる理由には、生物としてのヒトの存続にかかわる鍵が隠れているはずだ。

では表2-2および表2-3を中心に話をすすめていく。結果を単純化すればこうということだ。「中学生の頃まで、親とよく話をしたものはその後の性行動が低リスクなものになる。また逆に、中学生の頃まで、親と性に関する会話をよくしたものはその後の性行動が高リスクなものになる。」ということである。思春期の親と子は、なんでも話せばいいというものでもなく、あえて話さなくてもよいことがあり、それが性に関することである、というのがこのエビデンスから導き出されることだ。

これはわれわれにとって衝撃的なことである。はじめにも書いたとおり、われわれは、親と子は性に関してオープンに話し合うべきだという態度を保持してきた(エビデンスがないにもかかわらず)。しかしながら、現実には、世の東西を問わず、子どもと性に関する会話をよくできるものはごくわずかであり、われわれ専門家のメッセージは、一般の親(性について子どもと話せない)にかなり抑圧的なメッセージを出し続けてきたということだ。できもしないことを、あるいは、あえてしなくてもよいことを、われわれは親に求めてきた。このエビデンスから、今後の学校性教育における家庭へのメッセージは大きく変わらざるをえないだろう。

(5) 子どもに性を伝えること

では、親は子どもに性に関するメッセージをあえて伝えなくてもよいのか。言葉による性知識の伝達という意味ではそれほど重要ではないのかもしれない。しかし、子どもにとっての親の影響は絶大である。言葉による性知識の伝達はその一部分を構成するにすぎないであろう。今回の解析で、親が性に関して厳しかったかどうか、子どもの性行動を低リスクにするかどうかにか

関連していることがわかった(表2-4)。言葉による知識の伝達という範疇に入らないこの厳しい態度が、性に関する何かを子どもに確実に伝えており、かつ、その性行動に影響を及ぼしていると読み取ることができる。また、前項であつかったとおり、親はあえて性に関する会話をしないことで、子どもに何が伝わり、そしてその性行動に影響が及ぶのか。次項で仮説を展開していくこととする。

(6)「性に対する慎重さ」仮説の展開

親は誰でもが性交によって生まれ、性交によって子どもを生んでいる(生殖補助医療技術によるものはここでは考慮しないでおく)。その親が子どもに性を伝える際には、とくにそれが禁止や先延ばしのメッセージを含む際にはとくに、伝達のかたちをどうとるにせよ、そこにはある種の「やましい」感じや「ぎこちない」感じ、あるいは「いぶかしい」感じが伴うだろう。すなわち、伝達のかたちが、厳しい態度だったとしても、あえて触れない態度だったとしても、そこに子どもたちの性行動を慎重にさせる何かは伝わっているということだ。それがあある種の「やましい」感じや「ぎこちない」感じ、あるいは「いぶかしい」感じということだ。それらをコンフリクト・メッセージと呼ぶことにする。

子どもの性行動を低リスクにする環境とは、性行動を慎重にさせる何かは伝えられ、それが行動まで影響する環境を意味する。今回の解析から得られたことは、その何かとはコンフリクト・メッセージであるかもしれないということだ。ヒトは生物であるからにはいずれ性行動にいたる存在である。また、他の霊長類と同様、そこには快楽性やコミュニケーション性がともなっており、ゆえに性行動は子どもにとっても抑えがたきものとなっている。英語でabstinenceが適用される人間の行動は、まずは性行動である所以であろう。コンフリクト・メッセージが親から流れることにより(おそらく社会的にも同様の構図があるだろう)、性行

動を前に子どもは少しだけ立ち止まる。つまり、性は「安きものではない」という感覚がコンフリクト・メッセージから得られ、少しだけ立ち止まることになるのだろう。

子どもはいずれ性行動に至る。集団でみた場合、性交開始年齢の平均値変動は1歳から大きくて数歳の範囲であろう。しかし思春期の1歳はそれが社会的にも重要な差異を産む可能性がある。現状の平均値を1歳から2歳、上昇させることができる性教育(sex education)プログラムが開発できれば、そのインパクトは計り知れない。

(7) 帰結(中絶)に関連する因子

性行動という事実の確率的帰結、今回は中絶であるが、それには先の「中学生の頃までの」各因子はどのように関連しているのだろうか。

有意な関連がみられたのは、中学生の頃までの両親の仲であった。両親の仲が「悪かった」ものに、中絶経験が2回以上あるものが多い傾向がみられた(表3-1)。ちなみに、この因子は、さきの性交開始年齢とは有意な関連はなく、有意な傾向がみられるという範囲にあった。

つまり、親との普段の会話や性に関する会話が、中絶を繰り返すことに関連しているのではなく、両親の仲が悪かったということが中絶を繰り返すことに関連していたわけだ。ここには、前述のコンフリクト・メッセージを用いた「性に対する慎重さ」仮説はあてはまらない。なぜか。日本人の避妊方法は今も昔もコンドームである。コンドームのパール指数は決して高いものではない。80%台の後半である。100%に近い経口避妊薬(ピル)とは別のグループと考えたほうがよく、80%台前半の膈外射精と同じグループと考えたほうがよいだろう。つまり、ある程度は信頼できるが、あまり信頼してもいけない、というレベルの避妊法である(対STIを議論しているのではない)。そのようなレベルの避妊法が主流の社会(わが国)では、(異性間の)性交は決して低くはない確率で妊娠に結びつくだろう。

妊娠した場合、ある確率(十代の場合は70%弱)で中絶が選択されるだろう。どのような親子の会話がなされようと性に関する会話が意図的に忌避されていようと、性交にいたった場合には、ある確率で中絶にいたるということだ。今回の全国ランダムサンプリング調査では、中絶経験者(女性)は17.2%, 2回以上経験者はそのうちの33.1%であることがわかっている。

(8) 性行動とその帰結

今回は、性行動を性交開始年齢、そして性行動の帰結として中絶をとりあげた。性交開始年齢に影響する因子は親子の会話のあり方などであることがわかった。一方、中絶に関してはそれらの影響はみられなかった。親の仲の悪さが複数回中絶に関連しているようだった。

ここから見えてくることは、性行動を低リスク化するアプローチと、初回中絶を減少させるアプローチと、複数回中絶を減少させるアプローチは、それぞれ異なるということである。まず、性行動を低リスク化するアプローチには、環境におけるコンフリクト・メッセージがある。今回は家庭でのコンフリクト・メッセージを扱った。学

校と家庭の相互関係の上で成り立つコンフリクト・メッセージもあり、また、地域と家庭の相互関係の上で成り立つコンフリクト・メッセージもあるだろう。環境もしくは社会にも同様の性を存続させるシステムが巧妙に取りこまれていると予測される。

つぎに、初回中絶を減少させるアプローチは、不確実といってもよいコンドームに変わるポピュラーな避妊法を広げることである。代表的なものが経口避妊薬であるの一言を待たない。

最後に、複数回中絶を減少させるアプローチは、親がまず不和ではないということであるが、この関連因子についてはエビデンスが少ないのが実情だ。いままでわれわれは、中絶経験の有無を問うことは日常的に行っているが、複数回中絶を問うことはあまりしていなかったからだ。今後の研究をまつところである。

V. 謝辞

本稿を展開するに際し、福岡県遠賀保健所長である宮崎親先生との議論が多大なヒントを与えてくれました。ここに感謝いたします。ありがとうございました。

表1群. 度数分布表(7変数)

Q08S1 中学生の頃までの、両親の仲

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 1 良かった	579	45.6	45.6	45.6
2 どちらかといえば良かった	468	36.9	36.9	82.4
3 どちらかといえば悪かった	116	9.1	9.1	91.6
4 悪かった	107	8.4	8.4	100.0
合計	1270	100.0	100.0	

Q08S2 中学生の頃までの、普段の親との会話

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 1 よく話をした	798	50.8	51.1	51.1
2 時々、話をした	610	38.8	39.0	90.1
3 ほとんど話をしなかった	140	8.9	9.0	99.0
4 まったく話をしなかった	15	1.0	1.0	100.0
合計	1563	99.4	100.0	
欠損値 99	9	.6		
合計	1572	100.0		

Q10 中学生の頃までの、親と性の関する会話

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1 よく話をした	21	1.3	1.4	1.4
	2 時々、話をした	122	7.8	7.9	9.2
	3 ほとんど話をしなかった	599	38.1	38.7	47.9
	4 まったく話をしなかった	807	51.3	52.1	100.0
	合計	1549	98.5	100.0	
欠損値	99	23	1.5		
合計		1572	100.0		

Q11 両親の、性的なことに関しての厳しさ

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1 厳しかった	178	19.3	19.3	19.3
	2 どちらかといえ ば厳しかった	335	36.3	36.3	55.6
	3 どちらかといえ ば厳しくなかった	170	18.4	18.4	74.0
	4 厳しくなかった	240	26.0	26.0	100.0
	合計	923	100.0	100.0	

Q13 身近な人と、性に関する事柄についての話

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1 よく話をする	140	8.9	9.1	9.1
	2 時々、話をする	742	47.2	48.1	57.1
	3 ほとんど話をしない	536	34.1	34.7	91.8
	4 まったく話をしない	126	8.0	8.2	100.0
	合計	1544	98.2	100.0	
欠損値	99	28	1.8		
合計		1572	100.0		

Q16 子どもとの会話の頻度

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1 よく話をする	671	42.7	76.5	76.5
	2 時々、話をする	182	11.6	20.8	97.3
	3 ほとんど話をしない	15	1.0	1.7	99.0
	4 まったく話をしない	9	.6	1.0	100.0
	合計	877	55.8	100.0	
欠損値	99	25	1.6		
	999	670	42.6		
	合計	695	44.2		
合計		1572	100.0		

Q17 子どもとの性に関する会話の頻度

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1 よく話をする	27	1.7	3.1	3.1
	2 時々、話をする	244	15.5	28.0	31.1
	3 ほとんど話をしない	314	20.0	36.1	67.2
	4 まったく話をしない	285	18.1	32.8	100.0
	合計	870	55.3	100.0	
欠損値	99	32	2.0		
	999	670	42.6		
	合計	702	44.7		
合計		1572	100.0		

表2-1. 一元配置分散分析 (中学生の頃までの、両親の仲)

記述統計

Q26 最初の性交渉年齢

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
1 良かった	384	19.53	3.175	.162	19.21	19.85	12	32
2 どちらかとい えば良かった	329	19.36	3.160	.174	19.01	19.70	11	42
3 どちらかとい えば悪かった	87	19.52	2.901	.311	18.90	20.14	13	29
4 悪かった	80	18.58	3.026	.338	17.90	19.25	13	28
合計	880	19.38	3.136	.106	19.17	19.58	11	42

=0.097

表2-2. 一元配置分散分析 (中学生の頃までの、普段の親との会話)

記述統計

Q26 最初の性交渉年齢

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
1 よく話をした	539	19.53	3.135	.135	19.26	19.79	12	32
2 時々、話をした	415	19.40	3.223	.158	19.09	19.71	12	42
3 ほとんど話をしな か	104	18.55	2.882	.283	17.99	19.11	11	29
4 まったく話をしな か	11	18.18	2.960	.893	16.19	20.17	14	23
合計	1069	19.37	3.155	.096	19.18	19.56	11	42

p=0.019

表2-3. 一元配置分散分析 (中学生の頃までの、親との性に関する会話)

記述統計

Q26 最初の性交渉年齢

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
1 よく話をした	13	16.92	1.891	.525	15.78	18.07	14	20
2 時々、話をした	77	18.95	3.166	.361	18.23	19.67	12	29
3 ほとんど話をしな か	414	19.51	3.280	.161	19.19	19.82	13	42
4 まったく話をしな か	557	19.34	3.040	.129	19.09	19.59	11	35
合計	1061	19.35	3.145	.097	19.16	19.54	11	42

p=0.018

表2-4. 一元配置分散分析 (親の性に関する厳しさ)

p=0.001

記述統計

Q26 最初の性交渉年齢

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
1 厳しかった	120	19.76	3.244	.296	19.17	20.34	14	29
2 どちらかとい ば厳しかった	247	19.82	3.105	.198	19.43	20.21	14	32
3 どちらかとい ば厳しくなかつた	134	18.70	2.717	.235	18.24	19.17	14	30
4 厳しくなかつた	174	18.90	3.242	.246	18.41	19.38	11	29
合計	675	19.35	3.127	.120	19.11	19.59	11	32

表 2 - 5. 一元配置分散分析 (身近な人との性に関する会話)

記述統計

Q26 最初の性交渉年齢

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
1 よく話をする	106	17.75	2.976	.289	17.17	18.32	12	30
2 時々、話をする	539	19.06	2.843	.122	18.82	19.30	11	30
3 ほとんど話をしな	350	20.14	3.404	.182	19.78	20.49	13	42
4 まったく話をしな	66	20.09	3.017	.371	19.35	20.83	15	27
合計	1061	19.35	3.145	.097	19.16	19.54	11	42

p=0.000

表 2 - 6. 一元配置分散分析 (子どもとの普段の会話)

記述統計

Q26 最初の性交渉年齢

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
1 よく話をする	526	19.63	3.108	.136	19.37	19.90	12	32
2 時々、話をする	140	19.85	3.034	.256	19.34	20.36	14	35
3 ほとんど話をしな	9	18.33	3.162	1.054	15.90	20.76	12	22
4 まったく話をしな	6	20.83	2.317	.946	18.40	23.26	19	25
合計	681	19.67	3.089	.118	19.44	19.90	12	35

p=0.380

表 2 - 7. 一元配置分散分析 (子どもとの性に関する会話)

記述統計

Q26 最初の性交渉年齢

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の 95% 信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
1 よく話をする	18	19.83	4.148	.978	17.77	21.90	14	30
2 時々、話をする	194	19.73	2.724	.196	19.35	20.12	15	30
3 ほとんど話をしな	247	20.06	3.005	.191	19.68	20.43	12	32
4 まったく話をしな	219	19.21	3.340	.226	18.76	19.65	12	35
合計	678	19.68	3.090	.119	19.45	19.92	12	35

p=0.030

表 3 - 1. クロス表分析 (中学生の頃までの、両親の仲)

クロス表

			Q37TRIP 中絶経験・多回数			合計	
			0 中絶なし	1 中絶一回のみ	2 中絶2回以上		
Q08S1 中学生の頃までの、 両親の仲	1 良かった	度数 Q08S1 中学生の頃までの、 両親の仲の%	447 86.0%	43 8.3%	30 5.8%	520 100.0%	
	2 どちらかといえば良かった	度数 Q08S1 中学生の頃までの、 両親の仲の%	326 80.3%	60 14.8%	20 4.9%	406 100.0%	
	3 どちらかといえば悪かった	度数 Q08S1 中学生の頃までの、 両親の仲の%	83 79.0%	15 14.3%	7 6.7%	105 100.0%	
	4 悪かった	度数 Q08S1 中学生の頃までの、 両親の仲の%	79 79.8%	9 9.1%	11 11.1%	99 100.0%	
合計			度数 Q08S1 中学生の頃までの、 両親の仲の%	935 82.7%	127 11.2%	68 6.0%	1130 100.0%

p=0.012

表3-2 クロス表分析 (中学生の頃までの、普段の親との会話)

クロス表

			Q37TRIP 中絶経験・多回数			合計	
			0 中絶なし	1 中絶一回のみ	2 中絶2回以上		
Q08S2 中 学生の頃までの、 普段の親との会 話	1 よく話をした	度数 Q08S2 中学生の頃までの、 普段の親との会話の%	624 85.1%	79 10.8%	30 4.1%	733 100.0%	
	2 時々、話をした	度数 Q08S2 中学生の頃までの、 普段の親との会話の%	433 82.0%	61 11.6%	34 6.4%	528 100.0%	
	3 ほとんど話をしなかった	度数 Q08S2 中学生の頃までの、 普段の親との会話の%	84 74.3%	18 15.9%	11 9.7%	113 100.0%	
	4 まったく話をしなかった	度数 Q08S2 中学生の頃までの、 普段の親との会話の%	9 75.0%	2 16.7%	1 8.3%	12 100.0%	
合計			度数 Q08S2 中学生の頃までの、 普段の親との会話の%	1150 83.0%	160 11.5%	76 5.5%	1386 100.0%

p=0.075

表3-3 . クロス表分析 (中学生の頃までの、親との性に関する会話)

クロス表

			Q37TRIP 中絶経験・多回数			合計	
			0 中絶なし	1 中絶一回のみ	2 中絶2回以上		
Q10 中学生の頃までの、親と性に関する会話	1 よく話した	度数 Q10 中学生の頃までの親と性に関する会話の	14 73.7%	4 21.1%	1 5.3%	19 100.0%	
	2 時々、話した	度数 Q10 中学生の頃までの親と性に関する会話の	92 82.9%	12 10.8%	7 6.3%	111 100.0%	
	3 ほとんど話をしなかつた	度数 Q10 中学生の頃までの親と性に関する会話の	449 83.9%	60 11.2%	26 4.9%	535 100.0%	
	4 まったく話をしなかつた	度数 Q10 中学生の頃までの親と性に関する会話の	582 82.2%	85 12.0%	41 5.8%	708 100.0%	
合計			度数 Q10 中学生の頃までの親と性に関する会話の	1137 82.8%	161 11.7%	75 5.5%	1373 100.0%

p=0.857

表3-4 . クロス表分析 (親の性に関する厳しさ)

クロス表

			Q37TRIP 中絶経験・多回数			合計	
			0 中絶なし	1 中絶一回のみ	2 中絶2回以上		
Q11 両親の、性的なことに 関しての厳しさ	1 厳しかった	度数 Q11 両親の、性的なことに 関しての厳しさの%	135 80.4%	22 13.1%	11 6.5%	168 100.0%	
	2 どちらかといえ ば厳しかった	度数 Q11 両親の、性的なことに 関しての厳しさの%	246 82.3%	37 12.4%	16 5.4%	299 100.0%	
	3 どちらかといえ ば厳しくなかった	度数 Q11 両親の、性的なことに 関しての厳しさの%	118 80.8%	19 13.0%	9 6.2%	146 100.0%	
	4 厳しくなかった	度数 Q11 両親の、性的なことに 関しての厳しさの%	168 80.4%	25 12.0%	16 7.7%	209 100.0%	
合計			度数 Q11 両親の、性的なことに 関しての厳しさの%	667 81.1%	103 12.5%	52 6.3%	822 100.0%

p=0.974

表3-5 . クロス表分析 (身近な人との性に関する会話)

クロス表

			Q37TRIP 中絶経験・多回数			合計
			0 中絶なし	1 中絶一回のみ	2 中絶2回以上	
Q13 身近な人と、性に関する事柄についての話	1 よく話をする	度数 Q13 身近な人と、性に関する事柄についての話の%	107 84.9%	13 10.3%	6 4.8%	126 100.0%
	2 時々、話をする	度数 Q13 身近な人と、性に関する事柄についての話の%	540 80.4%	89 13.2%	43 6.4%	672 100.0%
	3 ほとんど話をしない	度数 Q13 身近な人と、性に関する事柄についての話の%	403 85.6%	47 10.0%	21 4.5%	471 100.0%
	4 まったく話をしない	度数 Q13 身近な人と、性に関する事柄についての話の%	85 83.3%	12 11.8%	5 4.9%	102 100.0%
合計			1135 82.8%	161 11.7%	75 5.5%	1371 100.0%

p=0.439

表3-6 . クロス表分析 (子どもとの普段の会話)

クロス表

			Q37TRIP 中絶経験・多回数			合計
			0 中絶なし	1 中絶一回のみ	2 中絶2回以上	
Q16 子どもとの会話の頻度	1 よく話をする	度数 Q16 子どもとの会話の頻度の%	464 76.4%	93 15.3%	50 8.2%	607 100.0%
	2 時々、話をする	度数 Q16 子どもとの会話の頻度の%	112 72.3%	27 17.4%	16 10.3%	155 100.0%
	3 ほとんど話をしない	度数 Q16 子どもとの会話の頻度の%	8 66.7%	1 8.3%	3 25.0%	12 100.0%
	4 まったく話をしない	度数 Q16 子どもとの会話の頻度の%	3 42.9%	3 42.9%	1 14.3%	7 100.0%
合計			587 75.2%	124 15.9%	70 9.0%	781 100.0%

p=0.137

表 3-7 . クロス表分析 (子どもとの性に関する会話)

クロス表

			Q37TRIP 中絶経験・多回数			合計
			0 中絶なし	1 中絶一回のみ	2 中絶2回以上	
Q17 子どもとの性に関する会話の頻度	1 よく話をする	度数	12	6	5	23
		Q17 子どもとの性に関する会話の頻度の%	52.2%	26.1%	21.7%	100.0%
	2 時々、話をする	度数	164	36	28	228
		Q17 子どもとの性に関する会話の頻度の%	71.9%	15.8%	12.3%	100.0%
	3 ほとんど話をしない	度数	205	40	24	269
		Q17 子どもとの性に関する会話の頻度の%	76.2%	14.9%	8.9%	100.0%
	4 まったく話をしない	度数	199	42	13	254
		Q17 子どもとの性に関する会話の頻度の%	78.3%	16.5%	5.1%	100.0%
合計		度数	580	124	70	774
		Q17 子どもとの性に関する会話の頻度の%	74.9%	16.0%	9.0%	100.0%

p=0.019

コミュニケーション・スキルの重要性とその方法

親業訓練インストラクター 久保 まゆみ

1. はじめに

平成14年度の厚生労働省と（社）日本家族計画協会の共同研究「男女の生活と意識に関する調査報告書」は、大変画期的で、興味深い調査結果を明らかにした。

「中学生の頃までに日常親と子が話をする機会がもてていた子どもは、性開始年齢が遅くなり、責任をもった行動がとれるようになる」ことを、全国規模の偏りの少ない母集団に対するアンケート調査から、精密で、詳細な分析結果として、導き出したのである。

今までも、援助交際をする少女達は早熟だからというより、家庭で満たされない寂しさを埋め合わせる行動として、肌のぬくもりを求めて、援助交際をしている、などの事例的な報告はあったものの、こうした大掛かりで客観的なデータから、子どもの性行動と親子のコミュニケーションの関連性を明らかにし、親子のコミュニケーションの大切さを改めて認識させてくれたことの意義は大きい。

2. 親子のコミュニケーションの現状

しかしながら、その大切な親子のコミュニケーションが十分機能しているかということ、かなりお寒い現状といわなければならない。

例えば、平成11年度に国は一般の中学生・高校生に「青少年の暴力観と非行に関する研究調査」を実施したが、その中のアンケート調査の項目「心を打ち明けてなんでも話せる人は誰か」という問いに対する回答は以下のようである。

	{同性の友人}	{誰もいない}
{父}		
中学生・男	44.0%	18.2%
4.8%	15.2%	
中学生・女	47.9%	12.8%
1.0%	21.1%	
高校生・男	48.9%	19.6%
2.3%	8.1%	
高校生・女	60.2%	10.1%
0.4%	10.8%	

この結果からも明らかなように、今親子の

コミュニケーションは、いわば危機に瀕しており、それだけに今回の「親と子のコミュニケーション・スキル向上検討会」のもつ意義は大きいといわざるを得ない。

3. なぜ今親子のコミュニケーションは難しいのか

俗に「十年一昔」といわれるが、近年の「子どもをとりまく環境」の激変ぶりには「五年大昔」といいたくなるような目まぐるしさがある。

(1) 核家族化の影響

過疎化する地方でも、過密化する都会でも、一家族の構成人数は減ってきており、一世帯の子供の数は二人を割り込むまでになってきている。

一昔前なら、年上の兄弟や叔父叔母といった存在が、「おやじはああいっているけど、その本心はこうなんだよ」とか、「ともかくおやじに謝っておけ。お前の気持ちは俺が伝えておくから」等と仲介役を果してくれていたところがあったが、今はそういう存在をほとんどあてにできない。

親の思いを子どもに通訳し、子どもの思いを親に代弁する仲介的存在を期待することはできない現在においては、親自身が親の思いを子どもにダイレクトに、しかも正確に伝えていくことが必要になってきている。

(2) 減っている共同作業

家事の省力化に伴い、子どもが家族の一員として、家事を手伝う必要性が減ってきている。子どもは稽古事や塾、学習に追われ、親も仕事や自分自身のことに忙しい。親子が緊密な連携をとって共に体験し、共に作り上げていく、というような「生活」場面というのは、ほとんど味わうことができなくなっている。共通体験を基盤にした共通意識が親子の間で薄れてきているのである。それは「いわなくてもわかる」基盤が弱体化してきているといえるのではないだろうか。

(3) 多様化し、個別化する情報

急速に発展する情報化社会の中で、たくさ

んの情報が親のフィルターを経ないで子供に流れ込んでいく現状がある。子どもにかかってくる電話ひとつでも、親の仲介を経ないで直接子どもが受け取ってしまう。インターネットなどで我が家とは生活環境が全く異なる人々と子どもがいつの間にか知り合ってしまうことも可能である。親を経てしか子どもに情報がいかなかった一昔前には全く考えられなかったことではないだろうか。

(4) 多様化するモラルや価値観

たくさんの情報が流れ込む中で、ファッションは無論のこと、モラルや価値観、時には言語でさえも、世代間で大きな変容と多様化が認められる。

親の語る熟語は子どもにとってはもはや死語であったり、子どもの使う省略語やカタカナ語は親にとって理解不能であったりする。

まして、モラルや価値観は親子の間では大きく異なることが多く、子ども同士であっても世代が少し異なるだけで、話が合わなくなるといわれている。

4. 必要とされる意識的関係作り

こうした現代社会にあっては、もはや昔ながらの「親の後ろ姿」や「以心伝心」だけでは子どもに親の愛情や価値観、思いを伝えることは不十分である。自然にまかせていては、親の本音は子どもに伝わらず、子どもの思いは親に理解されない。社会状況の変容に伴い、親といえども、否、親子だからこそ、意識して関係作りをしていく、意識してコミュニケーションしていくことが必要になってきている。

つまり、親の思いを正確に伝え、子どもの気持ちをしっかり受け止めるコミュニケーションが求められているのである。こうしたコミュニケーションを実現するためには、やはりそれなりの方法と訓練が必要になってくる。しかも、その方法は子どもの年齢、年代を越えて通用するものでなくては意味がない。

さらに、その方法はすべての親に適用可能とまではいかなくとも、親子関係を良くしたいと望む親にとって、ある程度の普遍性をもって、適用可能なものである必要がある。

5. 必要とされるコミュニケーション・スキルとはどんなものか

(1) 親は自分の気持ちを整理する必要がある
親子問題を考える時、下記のようなことがよくいわれる。

「親は子どもの話をよく聞く必要がある」
「子どもをありのまま受容するべきだ」等等。

それでは、親がカウンセリングを学び、カウンセリングの手法を使って、こどもの話を聞くようにすれば、親子の間によりよいコミュニケーションが生まれるのだろうか。

答えは「否」である。

なぜなら、カウンセラーはカウンセリングという、いわば仕事の場面において、「聞く」という「仕事」に徹することが可能だし、相手の問題を自分が抱え込むこともしない。

が、親はそうではない。

忙しくて「聞く」ことに徹することが難しいこともあれば、子どもの話を聞くうち、受容できない気持ちになることもある。むしろ、親は子どもが何か悩んでいたり、問題を抱えていると、親自身が子どもの問題を抱え込んで、自分が何とかしなければ、という自分の問題になってしまうことの方がずっと多い。

例えば、子どもが「学校でいじめられている」とか「学校へ行きたくない」と言った時、どれほど冷静に「聞く」ことができるだろうか？

自分の波だつ気持ちを押さえて「いじめられて辛いよね」とか、「学校がイヤなのね、わかるわ」と言ってみても、それはカウンセリングでいうところの「偽りの受容」に他ならない。口では受容を示す言葉をいいつつ、体全体では非受容を示す親ほど、子どもにとって、やっかいなものはない。どちらのサインが親の本音かわからないで、混乱をするばかりである。

親にとって、まず必要なのは、無理をして「いい親」を演じることでもなければ、カウンセラーの真似事をするでもない。

ありのままの自分の気持ちを確認することなのだ。

ありのままの自分の気持ちを確認する上でのポイントは以下である。

1) 親は子どものことを考える時、「行動」をみる

親はよく、子どもを「わがままだ」とか「だらしない」とか、もしくは「素直だ」と表現する。

しかし、そういう態度や性格として、ひとくくりにしてしまう時、そこには、相手(子ども)との関係性を改善する余地が失われて

しまう。「態度や性格」は永続的なもので、簡単なことでは変更不能だからである。今更
どういうコミュニケーションをとろうと、無
駄ではないか。話し合っ、よりよい関係
を作ろうという意欲が薄れてしまう。

しかし、相手の「行動」をみていく時、
自分にとって困る相手の行動は、一過性のも
のと考えられるから、変更の余地がでてくる。

例えば、「うちの子はだらしがない」とい
ってしまうと、その「だらしなさ」はどうや
って直せるのか、絶望的な気分になってしまうが、「脱いだ服をソファに置いたままにする」ということであれば、それは工夫の余地がある問題と思えるではないか。コミュニケーションの取り方次第で、子どもの行動を変更させ、子どもとの関係を改善していくことが可能になり、親側のコミュニケーション意欲が増すのである。

2) 自分に正直になる

親はいくつもの「神話」に縛られている
可能性がある。

「自分の子どもを分け隔てなく愛さなく
てはならない」

「その時の気分でOKと思ったり、ダメ
とってはいけない」

「両親でしつけが異なるとはいけない」

「感情的でなく、いつも同じようにしつ
けなければいけない」等等。

しかし、親も人間なのである。機嫌のい
い時もあれば、機嫌の悪い時もある。

同じ自分の子どもでも、相性がいい子も
いれば、いちいち勘にさわる子もいる。

場面によって、許せる場合と、許せない
場合がある。例えば、家族だけの食事では、
少くらい行儀悪くても気にならないが、お
客様の前ではイライラするなど。

そういう自分に正直になって、自分の気
持ちを整理してやる必要があるのである。

3) こどものサインに敏感になる

子どもは何か困ったり、イヤだと感じ
たりする時、「サイン」を発している。親が自
分の気持ちを整理しようとする時、そうした
子どものサインに敏感になる必要がある。

「必要がある」というよりも、現実に親が自
分の気持ちを整理しようすると、敏感にな
る、という方が、正確かもしれない。子ども
の行動で、「イヤだ」「困る」と親が感じて
いる行動のいくつかは、実はこどもが何か問題
を抱えていることを示すサインと考えられ

る場合がある。

例えば、「ドアをバタンと閉める」「階段
を足音高く上る」などの行動は、無論ただの
乱暴な行動である可能性もないわけではな
いが、子どもが何か問題を抱えていることを
示すサインである場合も多い。「ただの乱暴
な行動」としか思えない時は親は「うるさい」
とその行動に対して「非受容」になるが、「あ
れ、なにかイヤなことがあったのかな？」と
思う時、親の気持ちは子どもの行動を受容で
き、子どもの話を聞いてみよう、という思い
になれるのである。

4) ありのままの自分の気持ちを確認すると、 受容か非受容か分かれる

親が、自分の気持ちに正直になる時、子
どもの行動は受容できる行動か、非受容と感
じられる行動か、2つに分けられる。どちら
でもない、と感じる子どもの行動は、「イヤ
でない」のであるから、受容と考えることが
できる。

ところで、自分が受容できる子どもの行
動の中に、子どもが何か問題を抱えて、悩ん
でいる様子をしている、と思える場合がある。
この時初めて、親は「聞く」対応が可能なの
である。

また、子どもの行動が受容できない、と
感じる時、親は「聞く」ことはできない。「聞
く」ことのスタンスは、受容と共感であるか
ら、である。この時、親にできることは、自
分の気持ちを率直に「語る」ことである。

つまり、子どもの行動をどう感じ、受け
止めるか、で、親が子どもに対して使うコミ
ュニケーションのアプローチが変わってく
るのである。

例えば、こどもが「学校へ行きたくない」
と言ったとする。

この時、親には2通りのアプローチが可
能なのである。

ひとつは子どもの気持ちを受容できる、
と感じる場合。

「そうだよね、こう暑くちゃ行きたくな
い気持ちわかるよ」とか、「夕べも寝るのが
遅かったし、まだ寝たいの、無理ないよ」
と思えるならば、「子どもの気持ちを理解す
る」対応が可能である。

一方、受容出来ない場合。

「このまま不登校になったら、どうしよ
う」「学校行きたくないなんて、困るわ」と
思うのであるなら、親の気持ちを率直に「語
る」アプローチをしていくことになる。

どちらのアプローチがいいとか、悪いとかいう問題ではない。どちらでもいい。どちらでもいいが、ただ親自身の気持ちを正直に見つめて、自分の気持ちにあったアプローチを使うことが大事なのである。

(2) 子どもの気持ちを理解する

1) 子どもとのコミュニケーションを阻害する対応

子どもは「思春期」になると親と話をしなくなるといわれる。思春期の子どもに何を聞いても「別に…」としか答えてくれない、と嘆く親がなんと多いことか。しかし、子どもは「思春期」だから、親に話さないのではない。親が子どものためにと思い、子どもを愛すればこそ、と認めてする対応の数々が実は子どもの心を閉ざしコミュニケーションを阻害してしまっているのである。

例えば、こんな場合である。

「A君とケンカして、絶交しちゃったよ！」と子どもがいったとする

その時、親がしがちな対応は以下のようである。

命令	「仲直りしなさい」
脅迫	「そんなことでケンカするようじゃ、あなたが仲間外れにされるわよ」
説教	「いろいろな人がいるけど、仲良くできるのが大人というものよ」
提案	「あなたから謝ったらどう」
非難	「なんて気が短いんでしょ、わがままねえ」
賞賛	「あなたなら大丈夫よ。仲直りできるでしょ」
同意	「A君てひどい人なのねえ、お母さんも腹立ってきたわ」
尋問	「どうしてケンカしたの？ いじめられたの？ A君以外の子とは仲良くしているの？」
そらす	「明日になればまた気が変わるわよ、さあさ、ご飯にしましょ」

親は子供に頑張ってもらいたい、よくなってほしい、という思いでいろいろなことである。愛すればこそそのセリフなのだ。

しかし、いわれる子どもの側には、その愛が伝わっているだろうか？

残念ながら、子どもはこれらの対応に、「親はわかってくれない」「自分のことを理解してくれない」と感じてしまう。なぜなら、これらの対応は、親が子どもの気持ちを受け止

めないで、親自身の意見を言っているからである。

子どもはこれらの表現の中に「あなたはダメなヤツだ」「自分で問題解決する力がないから、わたしが解決してあげよう」という、隠れたメッセージを受け取っているのである。

親がいつもこういう対応をしていると、どうなるか。

イヤだなあと思っている悩みを親に話すと、説教されたり、小言をいわれたり、余計イヤな思いをしてしまう。反抗的な気持ちにさせられてしまう。

どうせ親はわかってくれない。

子供は小さい時からそのことを学習していくのである。

それが積み重なって中高生くらいになると、

「親になんて話せない」

つまり、親に対しては『心を閉ざす』ということになる。

1) 子どもの気持ちを理解する対応

子どもの気持ちを理解する対応は下記の6つである。

- ①沈黙 フンフン
- ②あいづち なるほど、それで、
- ③心の扉を開く言葉（うながす）
- ④繰り返す
- ⑤言い換える
- ⑥気持ちを汲む

① 沈黙

子どもが話しまくる時は親はただただ「聞く」ことしかない。うなずいて、聞いているよ、ということを示しながら、聞くのである。

② あいづち

子どもの話を「そうなんだ」「なるほど」など、相槌をうちつつ、「聞く」。意見をさしはさまないで、聞くのである。

③ 心の扉を開く言葉（うながす）

話しづらそうにしていたら、「わたしはあなたの話を聞く心の準備をして待っているよ、話したかったら、どうぞ、話して下さい」ということを示す方法である。

④ 繰り返す

子どもの言葉をそのまま繰り返すことによって、あなたの話を聞いて

いますよ、ということを示す。単に子どもの言う単語を繰り返すのではなく、共感と受容の姿勢で「聞く」ことである。

⑤ 言い換える

子どもの言葉を親自身の言葉に置き換えて、「わたしはあなたの思いをこう理解しましたよ。これでいいですか？」ということを示す。

⑥ 気持ちを汲む

子どもの言葉の裏側にある本当の気持ちを理解しようとしながら、聞くのである。ねらいはここにあるが、初めは難しいので、繰り返したり、言い換えたりしながら、「聞く」のである。

親業では、はじめの3つを「受動的聞き方」、あとの3つを「能動的聞き方」といって、区別している。

具体的な例を見てみよう。

中学生の例である。期末テストが明日返っているという日。

娘「期末テスト返ってくるの。どうしよう」

母「心配なのね」

娘「ああ、ドキドキする」

母「不安なのね」

娘「そりゃそうだよ。でも、今心配してもしょうがない。テストが返ってきて から心配しようっと」

そして、娘は自分の部屋に引きあげた。話を聞く前は不安そうだった娘がさっぱりした表情で自分の部屋に引き上げていった様子を見て母親は「受け止めることの大切さを実感した」と感想を述べている。

もし、母親が「だから、しっかり勉強しておきなさいっていったのに。もう終わってしまったもの、どうしようもないじゃない」等と言ったら、子どもは「話さなければよかった」と思って余計不快な気持ちが増して、勉強も手につかないのではないだろうか。

この子どもの気持ちを汲む対応の仕方は子どもがみずから問題を解決していく力を育て、自主性と責任感、他者への思いやりを育てる対応でもある。

子どもはイヤダという思いが一杯だと他のことは何も考えられない。でも、イヤという思いを受け止めてもらおうと、そこにとどまっていなくてすむ。

つまり、子どもは聞いてもらうことで、

自分の気持ちをしっかりみつめることができ、考えが先に進む。思考が発展するのである。

その結果、自分で解決策を見つけるかもしれない。親にいわれて何かをするのではなく、自主的に行動ができる、ということである。

そして、自分で考えて自分で行動したことには、自分で責任をとるから、そこで、責任感が育つ。人のせいにしたり、人に依存したりしないのである。

もし、解決策が見つからないとしても、自分の悩みを一生懸命受け止め、聞いてくれた親に対して温かい思い、信頼感をもつことができる。

そして、親から温かい思いを一杯受けて育った子供は他人に対しても温かい思い、思いやりをもつことができる。

(3) 親の気持ちを率直に語る

1) 「あなた」を主語にしたコミュニケーションを阻害する対応

親は子どもの行動が自分にとって非受容な時、どんな対応をしがちだろうか。

例えば、以下のような場面である。

子どもが約束した時間に帰ってこない。心配して、心配して、やっと、子どもが帰ってきた。

その時、たいていの親のセリフはこんなふうになる。

「なにやってたの！

今何時だと思っているの！

なんで電話の一本もできないのよ！

お母さんがどんなに心配しているかわからないの！

中学生にもなってそんなこともわからないの！

全く何考えてるのよ。

いつもいつも心配かけて、それで平気なの。

本当に思いやりのない子ね。

あなたはいつもそうなんだから、無神経よ」

こういわれて、子どもに親の心配していた思いが伝わるだろうか。

否、である。

子どもに伝わるのは、叱られた、怒られた、非難された、自分は親に拒否された、ということである。

当然、子どもは反発し、反抗的になる。

これらの表現に共通するのは、「あなた」が主語になっている、ということである。

「あなたは、なにやってたの！」

「あなたは、今何時だと思っているの！」

「あなた」を主語にした言い方は、親の子どもを思う気持ちが伝わらない、残念な対応であるが、日頃、つい親が口にしがちな対応である。

そして、それらは次の3つのポイントを満たしていない対応なのである。

- ① 効果的
- ② 言ったことで相手の自尊心が傷つかない
- ③ わたしとの関係を損なわない

① 効果的か

親は子どものことを思ってガミガミいうが、あまり自分の言葉が効果的かどうかを考えていないことが多い。

しかし、子どもにとって親の小言ほどわずらわしいものはない。

中学生3000人を対象にした意識調査によると、「親に対してどなったり暴れたりしたいほどに不愉快に思うことがありますか」という問いに、生徒の64%が「ある」と答えており、その理由は「くどくど小言を言われたとき」が74%で、一番多くなっている。くどくどいうことは効果的でないばかりか、親子関係を悪化するものである。

② 言ったことで相手の自尊心が傷つかないか

親は子どもに対しては油断しているというか、あまりこの点も考慮していないことが多い。

しかし、今スクールカウンセラーとして公立中学校の相談室にいて、痛烈に感じるのは、子供達の自尊感情の低さである。「どうせオレなんて」とか「わたしはできないから」という言葉が簡単にでてくるのである。

親がこどものためを思って言っている言葉が、こどもの自尊感情を奪っていることが実に多いことを、親は肝に銘じるべきであろう。

③ わたしとの関係を損なわないか

親子関係は、切っても切ることができないものである。親はそのことに油断して、子どもを傷つける言葉を平気で吐くことが多い。

かと思うと、思春期の子どもを持つ親の中

には、今はやりの「プチ家出」がこわくて、子どもにいたいことも言えない、という場合もある。

コミュニケーションをとることで、相手との関係が悪化するようでは、意味がない。

2) わたしを主語にして率直に親の気持ちを伝える対応

親は意外なほど子どもに自分の気持ちを伝えていないものである。親の本音を語ることは、親の沽券にかかわる、と思っている親も多い。

子どもの行動をガミガミいうことに慣れすぎていて、自分の本音が見えなくなっている親さえ、少なくない。

しかし、親が真剣に子どもに向き合い、本音で自分を語る時こそ、子どもは人間としての親を尊敬し、親しみをもつのである。

それでは、親の思いを率直に伝える対応とはどのようなものか？

親が「わたし」を主語にして、「語る」ことである。

例えば、こんなふうに、

「ああ、よかったあ。

お母さんホント、安心したわあ。

あなたの帰りが遅いんで、もう心配で心配で、どうしようかと思った。

ごはんもノド通らなかったよ。

ああ、ホントに無事でお母さんホッとしたわ」

「わたしは安心した」

「わたしはどうしようかと思った」

わたしを主語にして語ると、子どもには、親がどんな思いでいたかが明確に伝わる。

子どもは自分のことが非難されていないから、反発も少ない。

「わたしを主語にした言い方」は、効果的で、言ったことで相手の自尊心が傷つかない、わたしとの関係を損なわない、対応の仕方である。

そして、親の思いを伝えるところまでで、相手に行動を指示しないことで、子供自身がじゃあ自分は困っている親を助けるためにどう行動しようか、とそこで判断力や自発性、責任感が育ってくるのである。

(4) 訓練の必要性

この「子どもの気持ちを理解するー聞く」対応と、「親の気持ちを率直に伝えるー語る」

対応は、いわばコミュニケーションの車の両輪である。この両方を学び、訓練して使いこなせる時、「子をもって知る親の恩」（自分も子どもを持って初めて理解できる親の愛情）ではなく、「今すぐダイレクトに伝わる親の愛」を体感できるのであり、今求められるコミュニケーションのあり方といえるのではないだろうか。

しかし、こうしたコミュニケーション方法を身につけるためには、実は「訓練」が必要なのである。

単に本を読んだり、話を聞いただけでは、「試す」ことはできても、「使いこなす」ことは難しい。なぜなら、われわれは生まれてこのかた、古いコミュニケーション、コミュニケーションを阻害するような対応やあなたを主語にした言い方を、使い、使われてきたのである。

それを、新しいコミュニケーション、気持ちを受け止める対応やわたしを主語にした言い方を身につけるためには、体験し、実感し、繰り返し練習することが必要なのだ。

それはちょうど喩えてみるならば、ウォーキングのレッスンに似ている。

1歳過ぎの歩き初めの時から、われわれは毎日歩いている。しかし、正しく歩いているか、というとそうではない。体がゆがんでいたり、膝が曲っていたりする。

そこで、ウォーキングのレッスンは正しい姿勢を作り、美しい歩き方を学ぶのに有効であるが、レッスンを受けても、1週間たつうち、悪い姿勢に戻ってしまうことも多い。長年の習慣で悪いクセが身についてしまっているからである。いわば、「0」からの出発ではなくて、「負」からの出発である点が難しいのである。

コミュニケーションも同じである。親にはコミュニケーションスキル訓練プログラムが必要不可欠なのだ。

しかし、別な言い方をすると、適切なコミュニケーションスキルを学べば、どの人も適切なコミュニケーションを身につけることが可能なのである。しかも、適切なコミュニケーションを学ぶことが、単にコミュニケーションにとどまらず、自分自身を振り返ることとなっていく。

例えば「わたしを主語に言う」ということが「わたしは何を感じ、何をいいたいのか」を自分自身につきつけてくるのである。

また、「自分の気持ちを整理する」ということが、子どもを自分とは別の人格である

ことを実感させるのである。

それらのことは親業訓練プログラムを受講した多くの人が証明しているところである。

さらに、親がこうしたコミュニケーション方法を身に付け、実践することは、その対応を受けて育つ子供世代が自然にこの方法を身につけることを意味している。ママゴトの時、親が自分の言い方、口ぐせそっくりな我が子の「ママ」役に、ギョッとすることはよくあることである。親が適切なコミュニケーションを使うことで、子どもは期せずして適切なコミュニケーションを学ぶことが可能になる。

その意味で、今親が学び、訓練を受けることは、古いコミュニケーションの連鎖をたちきり、新しい適切なコミュニケーションの新たな連鎖を生み出すことになるのである。

6. 親のためのコミュニケーション訓練プログラム—親業

(I) プログラムの特徴

現在、親のためのコミュニケーション訓練について、システム化されて、統一されたプログラムを提供できるのは、親業訓練協会のみであろう。

そのプログラムの特徴を下記に述べる。

①心理学に裏付けされた理論がある

親業を開発したトマス・ゴードン博士はカウンセリングの祖ともいわれるカール・ロジャースの直弟子であり、親業はその理論の流れを汲むものである。その他に行動学、教育学などの理論を取り入れている。

②システム化されたプログラムがある

親業の基本プログラムは24時間であるが、その他にも6時間の入門講座がある。

これらのプログラムはガイドブックによって、内容が明確に規定されているので、伝えられる内容のバラツキがない。

③インストラクターの養成がしっかりしている

論文、面接を経て、養成講座は集中8日間である。内容は無論のこと、立ち方から、声の出し方まで、インストラクターは厳しい訓練を受けている。しかも、資格更新の条件も厳しく決められている。そういうインストラクターが全国に散らばって存在するため、全国どこでも、均質の講座が提供できる。

④ロールプレーを通じて体験学習ができる。

親は親をするうち、子ども時代の感性を失っていることも多い。親に言われる立場を口

ールプレーを通じて味わうことで、子どもの気持ちがより実感できるようになる。

⑤自分自身の問題と向き合って、演習できる
それぞれの家庭で、それぞれの問題があり、一般論では通用しない課題がある。親業ではワークブックを使って、自分自身の問題と向き合うことによって、複数の人と共に学びつつ、なおかつ自分自身の問題に向き合うことが可能である。

⑥どのようなアプローチを使っていくかという自分の気持ちの整理ができる

親業では、気持ちの整理から入る。それが親業の一番の独創性といえる。気持ちを受け止める聞き方（カウンセリング的手法）、親の気持ちを言う言い方（Iメッセージ）の理論は、親業以外の理論でも出てくるものであり、親業のみの独創ではない。しかし、気持ちの整理の仕方（行動の四角形）は親業独自の理論であり、これが、実生活の中で、「学んだ」コミュニケーションを「使える」ものとしてくれるのである。

⑦すべての人間関係に応用がきく

親業のコミュニケーション理論は子どもの年齢を問わない。0歳時から、成人まで適用可能なものである。さらにいうならば、人間関係全般に当てはまるコミュニケーションの基本的理論なので、親子以外でも十分適用可能である。そのため、親業の理論はいろいろな立場に応用された講座（教師学や看護ふれあい学など）として広がってきたのである。

⑧「スキル」の学習を学ぶことによって、自分自身の生き方を見直すことが可能

わたしを語っていかうとする姿勢、子どもを1個の人格として尊重する考え方、価値観の対立の解き方などを学ぶ中で、親は自分自身の生き方を見直すことになる。「親業は自分業」とよくいわれるのはそのへんのところであろう。

⑨孤立しがちな親同士が本音で語り合う場を提供する

現代社会の中では、親はなかなか本音を語

る場がない。社会的枠組みや立場を離れて、自分自身を安心してオープンにできる場として、講座は機能している。

また、子どもの行動一つにしても、人によって感じ方や受け止め方がこんなにも違う、ということを経験する人と学ぶことによって、実感し、自分の考え方や思い込みを見直すきっかけにもなっている。

講座のあと、自主グループを立ち上げて勉強を継続する人たちが多く「大切にしたい」と思わせる出会いを提供しているからであろう。

（2）親業の成立と発展

親業はトマス・ゴードン博士によって始められた『親が親としての役割を効果的に果たすための訓練』というプログラムが土台となっている。現在では、人種、文化を越えて世界40カ国以上に翻訳されている。

日本では1980年親業訓練協会が設立され、講座、講演会、書籍の出版、三種類の機関紙（親業、教師学、看護ふれあい学）発行など、幅広い活動を行っている。

そして、このコミュニケーションの方法はあらゆる人間関係に通用するものなので、さまざまな対象のニーズに答える形で発展してきている。

『教師学』は、不登校、いじめなどの問題が山積している教育現場でのコミュニケーション方法として、脚光をあびている。

『看護ふれあい学』は、これからますます増えるであろう介護、医療現場で、患者の生きる意欲を引き出すコミュニケーション方法として、注目を浴びている。

『自己実現のための人間関係講座』は上司と部下、夫と妻等様々な人間関係を円滑に結ぶコミュニケーション方法である。

親業が日本に入って20年余の現在では、これらの講座を受けた受講生は延べ11万5000人、インストラクター500名余を数えるまでになっている。

親業訓練協会TEL03(3409)8355/FAX 03(3409)8688

URL <http://www.oyagyoo.or.jp/>

思春期の
子どもと語るための
コミュニケーション
マニュアル

「親と子のコミュニケーションスキル向上検討会」

はじめに

平成 14 年度厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)研究「望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究」(主任研究員佐藤郁夫自治医科大学産婦人科額教室名誉教授)と(社)日本家族計画協会とが共同研究で実施いたしました「男女の生活と意識に関する調査」によりますと、以下に挙げるような結果が明らかとなりました。

1. 「あなたが生活する上で、あなたの行動や考えについて、最も影響を受けたのはどれですか」の問いに対する回答は、男女ともに親(男性 60.6%、女性 75.8%)が第 1 位でした。
2. 「(あなたは中学生の頃までに)、普段、親と話をしていましたか」と尋ねると男性の 87.0%、女性の 91.5%が「話をしていた」と回答しているにもかかわらず、「あなたは中学生の頃まで、親と性に関する事柄(人を好きになること、セックス、避妊、性感染症などを含めて)について、話をすることがありますか」には男 7.0%、女 10.7%と極めて低率でした。
3. さらに、「(中学生の頃までに) 普段、親と話をした」と回答した人は、その後の性行動に「話をしなかった」と回答した人に比べて、性交開始年齢が遅れる、初交時の避妊実行率が高いなどにおいて、顕著な違いが出ています。

この調査から、私たちは、親は子どもとセックス、避妊、性感染症など性にかかわるような話をあえてしなくてもよいが、(中学生の頃までに) 子どもと話をする機会を積極的に持つことにより、子どもが、性交開始の時期を思慮深く選択でき、さらに、性交の際の避妊や性感染症の予防など責任ある行動をとることができるようになる、というきわめて常識的な結果を具体的な数値をもった証拠とともに明らかにしました。

親はある程度の厳しさをもって子どもとのいいコミュニケーションを図ることが大切であることを知った私たちは、2003 年 7 月に「親と子のコミュニケーションスキル向上検討会」を立ち上げました。合計 7 回にわたって、親と子はどうすれば良好なコミュニケーションを図ることができるか、というテーマに沿って検討を重ね、その成果物として、出来上がったのが「思春期の子どもと語るためのコミュニケーションマニュアル」です。

調査結果からも明らかにいたしましたように、この場合の「思春期の子ども」とは、「中学生の頃まで」のお子さんを想定しております。このコミュニケーションマニュアルを、ご自分の日常の生活と照らしながら、折りに触れて活用され、お子さんとのいい関係を築かれますよう期待しております。